

暁台連句資料の補遺と考察

寺島 徹

尾張の中興俳人、加藤暁台（一七三二—一七九二）の未紹介の連句作品を紹介し、翻刻したい。

一 暁台の連句について

暁台には、その一座する連句を一覧することのできる全集・資料集等の文献が備わっていない。だが、はやく、満田達夫氏「蕪村と暁台—その連句作法をめぐって」（連歌俳諧研究66号、昭和59年1月）において、暁台の全連句リストともいえるべき一覧が示されていて貴重である。これは、歌仙形式主体で表六句をこえる長さを持つ連句を収集し、おもに蕪村連句との比較において初折の月の出所と表の述懐について調査すべく作成されたものであった。『暮雨巷連句集』（明和後期・写本）、『新冬の日』（曾洛編・文政元年刊、暁台真蹟模刻あり）等、写本・稿本系のものまで目配せされ、当時としては、かなり網羅されたものであったといえよう。

ただし、同様に設定された蕪村のリストが、その後の『蕪村全集』連句篇の完成によって、いくらか補われたように、暁台の連句リストも三十年の時を経て、数点の連句を補うことができるようになった。

満田氏の基準にそって考えたとき、そのリストにのる九十九巻に、つぎの巻を加えることが可能である。ほぼ年代順に並べてみよう。

○『月次俳諧』明和八—九年（天理図書館綿屋文庫所蔵、

逸漁文庫俳諧資料集わ九九四・五〇・三・五）

・「郭公」の巻 十四句（明和八年）①

○『月次俳諧』松 明和九—安永六年

（逸漁文庫俳諧資料集わ九九四・五〇・三・六）

・「ほととぎす」の巻 半歌仙（安永三年）②

・「牡丹散て」の巻 歌仙（安永三年）③

・「けふの菫」の巻 半歌仙（安永三年）④

・「物さらに」の巻 五十韻（安永三年）⑤

・「日盛りや」の巻 歌仙（安永三年）⑥

○『月次俳諧』竹 安永七—安永九年

（逸漁文庫俳諧資料集わ九九四・五〇・三・七）

・「朝熊や」の巻 半歌仙（安永八年）⑦

○『月次俳諧』梅 安永十一—天明二年

（逸漁文庫俳諧資料集わ九九四・五〇・三・八）

・「遠山や」の巻 半歌仙（天明元年）⑧

○「暁台・白雄ら俳諧歌仙」（仮題）（名古屋博物館蔵）

・「あはれ野や」の巻 歌仙（安永二〇年）
○『風羅念仏 東武之巻』

・「あまの家は」の巻 歌仙（天明二年）
・「ものいへは」の巻 歌仙（天明二年）
・「いかめしき」の巻 歌仙（天明二年）
・「やまさと」の巻 歌仙（天明二年）

○『書留五』（逸漁文庫俳諧資料集 わ九九四・五〇・五・一）

・「聞しるや」の巻 歌仙（天明三年）⁹

○『樗堂俳諧集』（天理図書館綿屋文庫蔵写本）

・「声くらし」の巻 歌仙（天明七年）
・「袖に見む」の巻 歌仙（天明七年）

○「暁台維駒俳諧歌仙」（仮題）（佐々木桂雨旧蔵）

・「日頃にくき」の巻 歌仙（安永期以降）¹⁰

○「羅城俳諧書留」（仮題）（架蔵）

・「冬枯の」巻 歌仙（天明期、寛政三年）¹¹

○『樗柴集』（頼原文庫蔵、年代不詳）

・「菜の花や」の巻 歌仙（安永期か）

本稿では、このうち、先行文献において未翻刻である太字にした逸漁関係の連句資料（④の五十韻含む）および⑩「日頃にくき」巻、⑪「冬枯の」巻について、翻刻紹介したいと思う。

翻刻する前に、これらの作品の背景と特徴について簡単に記しておきたい。逸漁文庫俳諧資料集（天理図書館綿屋文庫蔵・わ九九四・五〇）の写本資料は、明和末にはじまり、安永期に隆盛をむかえる、尾張暮雨巷の暁台一門と南勢川崎の逸漁一派の興隆を如実に示すものである。拙稿「安永期の暁台と伊勢俳壇―逸漁・樗良との関係を中心に」（国語研究10号、平成14年3月）でも述べたが、とくに、安永三

年の連句交流は、蕪村と暁台の上方における初交流の裏側で行われたものであり、流派の比較検討において資料的価値が高いものである。

「あはれ野や」巻は、暁台、以南、白雄、重厚、北鳥らが一座する新出の句幅（暁台自筆）。拙稿「加藤暁台の書簡と連句評点について」（連歌俳諧研究122号、平成24年3月）に紹介した。²

『風羅念仏 東武之巻』（天明二年）は、暁台が芭蕉百回忌取越追善のための奉財に回ったおりの二十九巻におよぶ大部の芭蕉脇起し歌仙の資料であるが、この四巻のみ満田氏のリストから漏れている。³

『樗堂俳諧集』（天理綿屋文庫蔵）所収の連句二巻は、暁台の伊予の弟子、栗田樗堂（蘭芝）との交流から生まれたもの。蘭芝とは天明七年の俳書『つまじるし』の交流が知られているが、『樗堂俳諧集』（自筆本）では、『つまじるし』未所収の歌仙を確認することができ。はやく地史に翻刻されながら、地方資料として暁台研究において看過されてきた。⁴

「日頃にくき」巻は、蕪村の弟子、黒柳維駒と暁台による、芭蕉脇起し歌仙である。性質は、一連の『風羅念仏 東武之巻』に近いものである。九十回忌取越追善事業（天明三年）前後に巻かれたものであろうか。書写資料で、筆蹟は暁台のものに似る。⁵蕪村の夜半亭系の主要俳人との芭蕉脇起し歌仙は興味深い資料である。

「冬枯の」巻は、架蔵卷子一卷にある尾張門弟との歌仙。資料の概要を示しておこう。

桂五・羅城・大阜・蘭水・五雄・葛井、松兄・土朗らにおける連句一巡十二句「鶯よ」巻、羅城・大魯両吟歌仙「吾門は」巻、羅城・士朗・周拳（暁台）・松人・閻毛・岱青・紀鳳・岳輅ら八吟歌仙「冬枯の」巻（翻刻¹¹）。発句評点（伊道点。題「芒」「鹿」、稲城・士朗・羅城・岱青・古仏・入素・紀鳳ら）、羅城ら宛土朗書簡三通（八日付、六月六日付、十一月十六日付）である（縦一六・五種×横六六〇・二

糰。料紙の貼り継ぎ)。暁台門の羅城、士朗を中心とした卷子資料であり、巻末書簡が羅城宛であることから、羅城のもとに残された資料が一卷にまとめられたものと推測される。羅城・大魯の両吟には、「辛酉(享和元年)霜月十日於大魯亭興行」とあり、卷子全体の成立はそのころか。暁台一座の歌仙(寸法、縦一六・五糰×横七八・二糰)は、暁台の筆蹟ではない(図参照)。一座する名古屋俳人松人が、『風羅念仏東武之巻』(天明二年)、『留守懷紙』(天明二年)以降に暮雨巷門に加わる俳人であること、「周拳」号(安永中頃から使用)を用いていることから、歌仙の年代は天明二年以降寛政三年までにかけてのものとして推測される。

『椎柴集』(左橋)は、頼原文庫のみに所蔵される孤本の俳書である。「菜の花や」巻は、暁台・左橋・五周の三吟。左橋は、雑俳点者として著名な大坂俳人、荷旃斎左橋であろうか。五周は、『秋の日』(明和九)から、『落梅花』(寛政五)まで入集する暁台の高弟である。成立は安永後期以降か。

さて、満田氏は、先述の論考で、暁台が初折の月の出所を七句目におく場合が多いこと、表の述懐句を忌避することを分析し、美濃派などの地方系蕉門に独特の傾向であると位置づけている。今回の連句の場合をこのような式目の観点からみてみよう。初裏の月の出所は、やはり七句目が基本であり、逸漁一派と暁台が同座する歌仙型資料七巻のうち四巻で七句目に月が出る。とくに安永三年の交流では、四巻中三巻で守っている。これは、同時期に行われた蕪村一派との交流と同じ傾向を示している(逸漁一派以外の⑩⑪の二巻でも七句目に月を出している)。表六句における目立った述懐もとくにみられず、暁台を中心とした歌仙が基本的に式目を遵守する傾向にあることが確認できる(ただし、⑩「日頃にくき」の巻で、表に「命」の語が用いられているのは、注意を要する)。ただ、このような傾向を都市系に対する

地方系蕉門の特徴として単純にモデル化するのでは早計であろう。今後、式目全体にわたって精査が必要であり、同じく逸漁一派と盛んに交流した地方系蕉門の樗良との比較も重要であろう。

なお、翻刻にあたり、句の清濁については原典を尊重する。前書においては、句読点を適宜補った。仮名遣いは原典のままとし、旧字体は新字体に改め、異体字は基本的に現行の字体に改めた。改行・改丁は「」で示す。

(注)

- 1 蕪村全集では、六点ほど補われている。
- 2 その後、矢羽勝幸氏「俳人加舎白雄の新作作品」(須高76、平成25年4月)に全文翻刻される。
- 3 服部徳次郎氏『暮雨巷集』『続暮雨巷集』(私家版)に翻刻がみられる。なお、『新幽蘭集』(文化十三年序、曾洛編)に、『風羅念仏』関係の連句で、「東武篇」「法会の巻」と重ならない巻が多く収載されている。今回のリストにあげていない芭蕉の脇起こし連句が多数みられるが、紹介・分析等は、またの機会に譲りたい。
- 4 『松山市史』(近世篇)、『愛媛県史』(第四章近世)に、『樗堂俳諧集』全体の翻刻がなされている。
- 5 「佐々木桂雨氏蔵」と印字される葉書(第十回朱樹会出品)の写真(影印)による(葉書欄外に「暁台維駒俳諧歌仙」と印が付される)。なお、架蔵の一軸に暁台自筆とおぼしき暁台独吟の脇起し歌仙(「寝ころや」の巻)があり、筆蹟も酷似する。この脇起し歌仙の紹介については別稿を期待したい。
- 6 逸漁文庫俳諧資料集の『月次俳諧』梅 安永十天明二年(38)における天明元年の条(本稿翻刻資料⑧)に「暁子一名周拳」とある。
- 7 『椎柴集』は、服部徳次郎氏『続暮雨巷集』(私家版)にすでに翻刻紹介

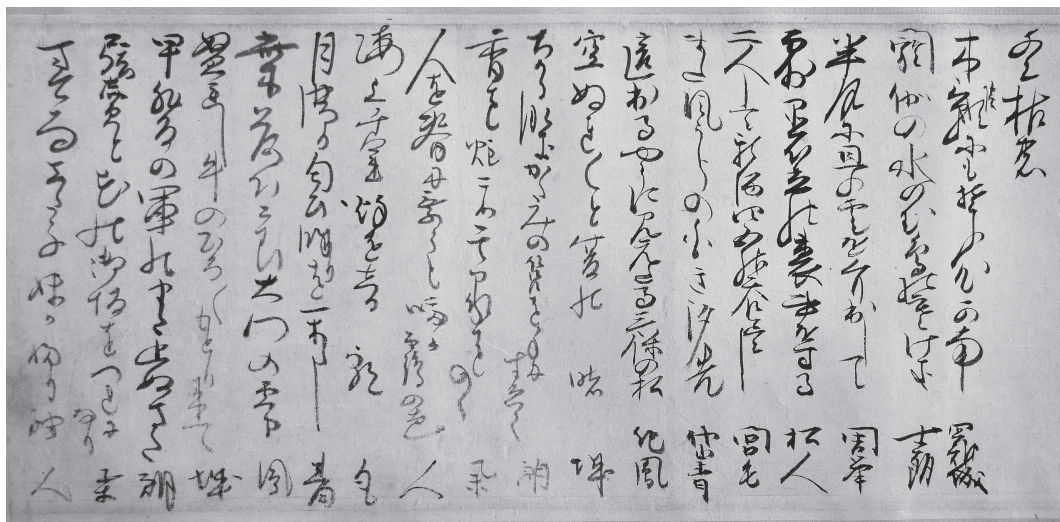


図 ⑪「冬枯」巻 (部分)

されるため本稿では翻刻しない。なお、俳書の成立は享和三年以降である。
8 『常夏草』(碩水編、弘化四年)に、七十一歳の左橋という尾張系の俳人がみえるが、安永期中頃の生まれになるので別人であろう。

二 翻刻

①「郭公」の巻 十四句 (明和八年)(わ九九四・五〇・三・五)

四月六日夜会

郭公野山をものにたハむれす

有明にけり夏の夜の月

つたなくも心のまゝに交らひて

ふくへひとつにことのかけさる

襟垢のいく代経ぬらん皮羽織

御幸道とて今に畑中

かけろふに動くやうなる石地藏

浮れ初たるきさらきのすゑ

やふ入に祖父か恋をうら問ハれ

咄の残る溝のかけはし

大根に巢の通りたるうるふ月

頼母子の金分る志賀寺

村雨に濡るかてんの身こしらへ

ますほの論に夜ハ更にけり

此すゑ深更にて止ム

暁台

逸漁

楚竹

南河

逸

台

河

竹

台

逸

竹

河

逸

河

「

②「ほととぎす」の巻 半歌仙(安永三年)(わ九九四・五〇・三・六)

四月廿七日暁台子丈芝老入来

同廿八日支朗都貢兩子入來有
宝珠院にて興行

ほと、きすされハ朝熊を軒の山

川に水なく明る短夜

あらし布一わかねつ、負連て

今の国司の結講をいふ

澄きつて二百十日に残る月

むくらの鶉啼て立行

秋の旅命のために乞食せむ

見たし聞たし南朝のすゑ

苔生る一本の松の枝陰に

顔に扇の昼寐する也

椽先へ無絃の琴も投遣りて

鱗をうこかす肴買ぬる

暮の月貝を吹出す泊りふね

踊くつれて雨になる空

嗟哦の秋材木町ハ人通り

價もとらず虫歯呪ふ

告ごよと花の名残を契り置

霞に聞ゆ夕くれの鐘

未満して止

③「牡丹散て」の巻 歌仙 (安永三年) (わ九九四・五〇・三・六)

五月二日南河亭興行

一盆花一盆鮮肉対するハ何

牡丹散て松魚になかむ華もなし

塵はらひ得ぬ麦秋の宿

伝え持后に古體の文字ありて

錢十貫の褒美いた、く

朝の月鯛引さく鱸の実

新綿積て舟出するなり

気味よけに洗濯袷着かへけり

加茂はめつたによ所の火を忌

祝ひ事正五九月を重にして

いよ／＼つる祖父の片意地

乙娘なく／＼尼に刺こほち

兵乱止ミて世の静さよ

月冴る霜夜そ筏下すらむ

枯野に啼てものすこき鹿

捨し世に詠し恋夜のうとましや

隼人と呼はふ輿の上臈

夜すからを桜の陰の遠か、り

水音高き春雨の後

つとめむと庵鎖せる行基の日

持病の癩のとくとおさまる

氣立よき阿波の旅人つれ立て

宇都の山辺のいちごころ也

白雨の降そこなひていきれ

汐の干きりてあくミ居る船

しられしとたハめハ衣を引かつき

薬買ふ夜の月ハつれなき

何某の家にも見ゆる秋のつゆ

こゝろはかりそけふの絵行器

百ちかき僧まめやかにもの語

丈芝

滄洲

逸漁

真魯

楚竹

「

滄洲

南河

逸漁

真魯

滄洲

丈芝

南河

逸漁

「

南河

逸漁

真魯

滄洲

南河

楚竹

「

滄洲

逸漁

「

滄洲

丈芝

④「けふの暮」の巻 半歌仙（安永三年）（わ九九四・五〇・三・六）

五日楚竹亭興行

端午の夜宴ハ楚竹の亭に「催されて

けふの暮風おもむろに香を酌む

暁台

いふせとも蚊の去りかぬる暮

楚竹

いつしかに野面ハあきの露置て

逸漁

川辺の柳半散けり

南河

つれくくと鶴匠イ月の空

丈芝

落せし笛を尋ね廻りぬ

滄洲

つかの間に契し恋のわすられす

真魯

君か涙か雨の降出し

只浩

かな川の台に一夜のやとりせむ

丈芝

我にひとしき盤圭の弟子

暁台

敵なから恥有けふの軍立

逸漁

霧晴わたるしの、めの空

南河

残る月あれたる庵に鳴の来て

只浩

剃ての後のや、寒き事

楚竹

一盃の酒に齢も延ぬへし

南河

馬で越ス川牛で越ス坂

滄洲

雪垣たハむ音すさまじき

南河

伊勢講の間に合かねる酒の味

楚竹

親の異見の諸事に利也

逸漁

成長手たすけをする男の子

真魯

庚申うらの畠三反

暁台

雨の夜の花に狐や狂ふらん

滄洲

東風もましらぬ鐘しつかなる

丈芝

花の雲鄙も都も古郷も

真魯

夜番止ぬる如月のすゑ

逸漁

未満止

⑤「物さらに」の巻 五十韻（安永三年）（わ九九四・五〇・三・六）

五月六日丈芝老餞別越坂神護寺興行

たより嬉しきとよめりける「伊勢の人くに別る、とて

物さらに言ハて指す花柑子

丈芝

おもひ出らめかつミ葺軒

南河

酒のなき雨の一夜をたてかねて

滄洲

とりに遣りたる琵琶も戻らす

逸漁

下さまの詞つかひの拙さよ

楚竹

道ふミ迷ふ山の入口

真魯

月高く明てしきりに秋の声

暁台

わたり初ていろくくの鳥

司木

菊の花咲か、りたる嬉しさに

只浩

晝屋ふたり呼に遣りけり

暁台

聲との、田舎くくとこほさる、

南河

聞わかち得ぬ文の方言

楚竹

陰謀のあらハれ口に退いて

真魯

石に秘をく守観音

暁台

百日の早に隴の水たへす

南河

風しはし、て峨眉山の月

逸漁

身ハ露と捕ハれの身の馬に乗

滄洲

早稲田の鶴も子にや啼らむ

暁台

去年ことし隠居に家督分て退キ

真魯

甘あまりの霞春めく
 花の下君か来る間を立つくし
 根太の膿の出で助かる
 面壁を十日餘りに倦果て
 見捨て過る古郷の山
 神鳴の跡に一声ほと、きす
 しのひあふ夜の障子もる影
 恋なれや老ゆく年に恥もせて
 あられはらく、篠の中道
 山伏の人を勾引す冬の暮
 鎖す用意の火をとほす也
 羯鼓うつ朝妻船を流しけり
 時のたはれに取かハす袖
 絹壳の頃日雨にとめられて
 月見の客の調齋をする
 鶏頭けいず花はな夕ゆふ日はゆく落かゝり
 野分のふのあとの屋根をしつらふ
 玉眼たままなこの一ツぬけたる焰魔王
 我身わがみなからもあさましう寝る
 敵かたきにも逢て此世になからへて
 二百目はかり払ひ有際
 節季候に交りて躍る酔機嫌
 うしや卵たまごをとり落し割
 尊たうふとけに見ゆる法師ほふしの齡としの程
 暮くれに及びて渡し舟呼
 月の秋鶺鴒せせり殿どのあたりの芦あしを伐
 折をからしをり萩はぎうたひ行

南河 南河 滄洲 滄洲 南河 滄洲 滄洲 南河 滄洲 南河 滄洲 司木 眺台 只浩 真魯 眺台 逸漁 只浩 真魯 眺台 逸漁 只浩 真魯 眺台 逸漁 南河 真魯 眺台 逸漁 滄洲 滄洲 南河 滄洲 眺台 南河

「

「

⑥ 「日盛りや」の巻 歌仙(安永三年) (わ九九四・五〇・三・六)

叫ふ鵲何に恐れし声なるそ
 垣も崩してほつくと焚
 来る年の花に年波をなかめける
 東風吹朝をまつや便りと
 五月八日予宅にて興行 予ハさはり有て他出
 日盛りや若葉か中の鳩の声
 舟さしよける岸の麦糠
 髪さへも結ハぬ童のさかしくて
 とほしの陰に夜具まくりをく
 月の朝旅商ひの荷を仕わけ
 城にの太鼓たいこの踊崩る、
 露の色あはれ浅く少しの草の原
 記念きねんのきぬを取出し見る
 心こころなう啼なや初瀬はつせのほと、きす
 杉しのぎの木立のぎのすんくととして
 しの、めに起て水汲老の業
 意地に募りし目もと怖し
 勝公事かつこうじの畠はたけの境さかいに繩なわを張
 妙義めうぎ参まゐりの連つらにおくる、
 あまた有中に乙子の愛深く
 管弦くわんげんはしまる春の夜の月
 蛙か鳴て花も凋しぼめる風情あり
 ふたつに成りつ三つに成蝶
 則清すなはの昔むかしゆかしき恋ここ、ろ
 おもひ捨てても輪廻りんじやうさたなき

文芝 眺台 逸漁 滄洲 南河 滄洲 眺台 真魯 文芝 滄洲 南河 眺台 滄洲 南河 眺台 滄洲 南河 滄洲 眺台 南河 滄洲 眺台 滄洲 南河 滄洲 眺台 滄洲 南河 滄洲 眺台 南河

「

「

寐もやらて夜ハしら〜と明る窓

雪つもりてや遠き梅か香

仙台の木綿附出す男とも

とくとおしゆる道明寺道

山梔子のとへとこたえも泣ふして

針の莖のうき世てハ有

初嵐巫峡の夜半の猿の声

雲をおひつゝ落かけの月

とびろくに先手の勢を競ハせて

背高き法師小松かなくなる

しつかさや富士の根方の鶴の声

笥ほそりて夜の明るなり

敷島の冥加ありける夢の告

宗祇の駒の門にいな〜く

花二木初あり又終あり

三月中の四日五日過く

⑦「朝熊や」の巻 半歌仙(安永八年)(わ九九四・五〇・三・七)

九月 名古屋連衆於箕亭興行

朝熊や嵐の微雨の秋を描く

月は五日のはつ雁の前

詩百篇新酒一斗を傾けて

焚火にちかく古藁に座し

とや〜と綱引を分る門の声

華おふかたに合歡の朝明

背負たる宿直袋をとり落し

主殿の祖父の行違ひ罵る

魯 河 浩 芝 洲 魯 河 芝 河 魯 台 洲 芝 浩 河 魯

風ある、星の光の師走前

手くりりに転し出す木綿荷

大坂や人気すなほに又強し

菊の祝ひに替る盃

月の色水にうつさは消ぬらん

風ひや〜とこゝろよき暮

古恋を語れハうれし涙にて

夢のうき世ものひる玉の緒

花こゝに咲そめて見れば花の雲

朱簾先捲け方〜の春

末乱興

⑧「遠山や」の巻 半歌仙(天明元年)(わ九九四・五〇・三・八)

同(八月)五日中寺町明善院興行

遠山や身をうちつけて風の雁

里は雨間をいそぐ稲荳

有明の月に小橋の水まして

酔売のこけし匂ひなりけり

将棋盤しまへは店の人は散

調市あかりのおとなふる顔

結納の酒ひらさする朔日に

咳かゝりたる鉢の寒菊

うつゝなき佛子のさきの冬の蠅

ものゝ氣去りし女目をあく

うかりける暁を今宵待かねて

氣比の浜手に船よハふ月

秋の色旅のあハれのおもしろく

滄洲 逸 毛 父 朗 河 馬 洲 台 窓 江 楚竹 秋江 周拳 漁 江 竹 拳 漁 河 拳 江

芋に喰あく此五六日
ものことにきまりのつかぬ新名主

若艸生ひし水損の跡

なとてこハ花に鉋打氣疎しや

春日のとかに牛のニレ嘯ム

末さハりありて止

河竹魚拳江

⑨ 「聞しるや」の巻 歌仙(天明三年)(わ九九四・五〇・五・一)

正月十九日会

歌仙

弥生の桜ハ十五丁に余りあり。けふの桜ハ「八町にたらずとなむ。興情恋々大盃を」引うけて前山の雲を幽望す。

聞しるや雨烟る方の花二樹

田螺の声の幽なる暮

判形の入木に村の春留ミて

今としもあたる綿の買置

気さきよき人を振舞月の前

秋の池水菱拾ひ来る

呉の国は東はつれの田舎うた

駅路の鈴のすめる明方

新枕嘶の絶て恥すかしき

肘のかゆきも折くハ憂

柵檀の花しめりするうす曇

御蔭祭の供奉にさられる

内職のさけ緒組手のはかとらす

風呂にはくられて寒き宵月

たかべ啼水面ものなき外廓

河竹魚拳江 台 魚 望 河 朗 台 魚 河 望 朗 台 魚 望 河 朗 台 魚 望 河 朗

毎との馬を責る前髪

時行出の足利染に黒羽織

雨ハ夜晴のあしだ引つる

茗から破りても見たき牡丹畑

ミヤびこゝろの春を欲ぼる

きさらきや局中間の品さため

ひくき行燈の影おほる也

丁つかひきれて屏風の片開キ

いやしめられて名乗口おし

大樹寺の戸に打つけし太刀の鞘

雪降しきる酔のさめくち

声遠く野すちに登る川千鳥

灯火見ゆる鳥羽殿の亭

けふの月御妾逝し沙汰ありて

男さかりを露のぬれ衣

徒然の教化身に入秋なれや

犬ハやすく椽に産する

水の後ト北本庄ハ荒れにけり

松火なを焚星の明ほの

雉子追のきじ見失ふ花の陰

山吹咲る滝の元すゑ

⑩ 「日頃にくき」の巻 歌仙(安永期以降)

日頃にくき鳥も雪の且哉

枯木たふれし木からしの後

命なり二とせ同じ道こえて

朗河望台 朗河望台 朗河望台 朗河望台 朗河望台 朗河望台 朗河望台 朗河望台 朗河望台 朗河望台

(芭蕉)

暁台

維駒

かつきものをも取おくれたる
むしはミテ屏風ほつる、月の宿
鼠の笑ふ秋のわひしら

雨つれ／＼菊の御宴も過けらし

けふの恥めに入道をせむ

あたにやは書よむ女忘れかね

蟬はやしを出はつれの里

蟬ならぬ声も交りて蟬の声

昼寐の夢や白雲に入

月の秋一万俵の利にわかれ

萩の葛西に鯉を切ラせて

鎧着て筆とる露の硯水

めてたき髻にふる、春風

きさらきも半暮行法の花

狐格子に柳すんこり

うき人にしハかれ声を聞しられ

狂哥を書てもとる羅

笋の皮降おとすさはら雨

けふも無常を積し灰山

もろこしへ金投へく思けり

博士を近く舟へ呼よせ

鶴の声時に第二の絃きかれて

神の晝風も吹冴

すさましく草にかくる、霜の月

酒ねだるなる奈良法師たち

ねたむ事あれハや色に見えぬらん

玉のすたれも憂日ありけり

全 台 全 駒 全 台 駒 駒 全 台 駒 駒 駒 駒 駒 駒 駒 駒 駒 駒 駒 駒

くもりかちに暮行かたの蜘蛛の糸
おもたき石を荷せて来る
他阿弥陀を袖にすかりて歎と、め
あはれむき粉と詠れけるにや
百年のむかしを見れば花にほふ
春の行衛も尽ぬ道芝

駒 台 駒

⑪ 「冬枯」の巻 歌仙(天明期)寛政三年(「羅城俳諧書留」)

冬枯の木影にもそふ心かな
閑伽の水のむ鳥の寒けき
半月に旦の雲をくり出して
露置笠の裏書をする
二人して新酒四五升呑尽し
また風うらの白き汐告
這出るやうに見えたる三保の松
空ぬれ／＼と夏の曙
ちからなきかたみの筥を手ですゑて
香を炷こめ其家をのく
人を背に乗うと啼か鶴の声
海上千里秋をしる朝
月満る匂ひ餘りを一あらし
桑荷ひこむ大門の霧
盗れし牛のころ／＼もとり来て
甲斐の軍のまた止ぬさた
弦売と花の御坂をつれになり
春雨あたためたら妹かぶり袖

羅城 士朗 周拳 松人 閻毛 岱青 紀鳳 城 朗 拳 人 毛 青 鳳 城 朗 拳 人

帰る鴈恋しき方を鳴やらん

餘り肥たる麦壘アヘをなく

仆間のかはりに渋き酒くみて

よそより早く燈をとほしけり

かり／＼と底きしるなり高瀬舟

一かたまりに御講参りの

薄雪に紅葉はさまる石の間

また宵なから千鳥啼月

我先に荷ふ若さの送り鯛

遊女の駕の早き町中

落る泪恋しき人キにふませたき

鉦の緒切れてへつたりとこけ

稲妻の中より出たか時鳥

まつ気色立膳所の涼風

筆買に智月か供をはしらせて

草のやうなる松を曳也

明に大悟す一百由旬花のふる

濁りなくなる冴解の水

岳輅

青

毛

城

鳳

挙

朗

輅

人

毛

青

鳳

城

朗

挙

人

輅

青

(注)

- 1 「月次俳諧」松の安永三年の最後尾に、この五十韻と同じ連衆による別案の一巡が示されているが、省略する（発句と脇のみ同案）。
- 2 頭注の形で「鴨の事也」と記す。
- 3 句が張り紙で訂正された痕跡がうかがえる。

〔付記〕本稿は科学研究費（基盤研究（C）課題番号：24520245）および学研究振興資金による助成の成果の一部である。また、綿屋文庫「逸漁文庫俳諧資料集」所収の暁台一座の連句について翻刻（該当冊子の部分翻刻）をご許可くださった天理大学附属天理図書館に感謝申し上げます。